

[28] エイフマン振付『チャイコフスキー ～光と影』

＝ パ・ド・ドゥの変容 ＝

1994年11月11日 東京新聞 夕刊

パ・ド・ドゥというのはフランス語で「二人の踊り」という意味だが、クラシック・バレエには欠くことのできないものだった。女性はチュチュという薄物の衣装を着て優雅なポーズを作り、男性は後ろから女性を支えて騎士さながらの気高さを見せる。古典バレエがピークに達するとき、そこにはバレエ芸術の精華としてのパ・ド・ドゥがあった。

そのパ・ド・ドゥが最近、さま変わりしている。衣装も変わったが組み合わせも変わって、男二人のパ・ド・ドゥというのが出現した。ローラン・ブテイの『ブルースト』にも同性愛の男のパ・ド・ドゥがあったし、ノイマイヤー振付の『幻想く「白鳥の湖」のように』でも主役の王と影の男が一緒に踊る場面があって、いずれも心理の深淵をのぞかせた独創的な表現に深い感銘を受けた。

そして今回また印象的な男性パ・ド・ドゥを見る機会があった。レニングラード・バレエ・シアターによる『チャイコフスキーく光と影』である。

* * *

ロシアには珍しい現代バレエの振付家エイフマンが、数年前から自負をもって予告していた作品で、有名な作曲家の私生活と内面の葛藤を描いたバレエである。

舞台中央に置かれたベッドに横たわるチャイコフスキー（ガリニャーテン）を近親の者が見守っているところで幕が開く。瀕死の作曲家は生涯を回想す

[28] エイフマン振付『チャイコフスキー ～光と影』

＝ パ・ド・ドウの変容 ＝

1994年11月11日 東京新聞 夕刊

る。パトロンのフォン・メック夫人との出会い。妻
ミリュコーワとの結婚。そのどれもが幸福の幻影と
苦渋の現実のないませだ。花嫁のベールは穴だらけ
の灰色のシーツになって彼をがんじがらめにした。
彼の中にはもう一人の自分がある。髭をたくわえ
一人前の社会人であろうとする作曲家に対して、彼
の分身は相似形ながらずっと若く夢想的で、反抗的
である。

その二人が踊るパ・ド・ドウは、調和するかと思
えば反発し、求めあつては離反して、一人の人間の
揺れる心模様を身体表現として視覚化した。

男女のパ・ド・ドウは肉体的な条件に違いがある
ために、男性はどうしてもサポート役になってしま
う。そのために女性ダンサー優先のバレエが女性向
きのスペクタクルと見なされるようになったとも考
えられる。だが男性二人の場合には本来のダイナミ
ズムを十分に發揮できるうえに、相互に持ち上げた
り支えたりすることもできるので、その意味では舞
踊としての可能性は大きくなる。

分身が別の若い男の後を追えば、若いカップルの
間に分け入って奇妙なからみを見せる。そしてフォ
ン・メック夫人の援助を受け入れることの屈辱と、
彼女の愛を受け入れることのできない苦悩がチャイ
コフスキーの心をむしばんでいく。孤独と絶望から
すきんだ情欲のとりことなる妻ミリュコーワ。フォ
ン・メック夫人を踊ったアルブソワは、美しい体

[28] エイフマン振付『チャイコフスキー ～光と影』

＝ パ・ド・ドウの変容 ＝

1994年11月11日 東京新聞 夕刊

の線を伸びやかに使ってクラシック・バレエとはまた異質の気品ある造型を見せ、ミリユコーワを演じたクスミナは過激な動きと表情で痛ましい精神錯乱の地獄絵を描き出した。

* * *

エイフマンという舞踊作家は、ダンサーの集団と大小の道具を使って舞台に大胆な構図を描くことに優れている。しかし今回はそうした集団の造型よりも個々のダンサーの演技のほうがより強い印象を残した。テーマがもっぱら内面的なものであったせいもあるだろうが、それと同時に、この創立十五年の若いバレエ団のメンバーが着実に腕を上げていることの証左でもあるかと思う。

このバレエがロシアで初演されたとき、反対のデモがあったという。国民的英雄を貶めたのは許せないということらしいが、苦悩のイメージは確かに哀切きわまりないものの、さほどスキャンダラスなものとも見えなかった。もしかすると現代の日本は、ある種のタブーに対してかなり鈍感になっているのかもしれない。いずれにしても、認識が改まるにつれて芸術表現もまた未踏の領域に分け入っていくのは確かなことで、最近のバレエも新しい表現のスタイルを着実にものにしつつある。